

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 粉炭籠 : 雑録 |
| Author(s) | 閑外房 |
| Citation | 龍南會雑誌, 77: 58-59 |
| Issue date | 1900-02-28 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/5489 |
| Right | |

粉炭籠

關 外 房

○炭 夫れ久まゝして腐る木、それは生性あるが故にして炭の地に入りてなほ朽ちざる、これは生性なきが爲めなり、焼かぬむかまの雪の枝に白炭の忠知世に謠はれ、同じ魚の炭焼鯛はまことに心苦し、小野の炭よきは必に入れて火桶をかこむ上臈の夜がたり、こまらへし炭を箸してはさむ白衣のつかさ、さては五寸三寸の切炭に爐中の君子をめづる老らくの晝、みなとり／＼に心にくまや炭挽くや黒くなりたる左の手

○炭團 はやて強く、ものゝ板、蓆、もろどもの吹きかへされて、こゝらの炭團法師、皆こころとまろび落ちたる、或は灯火くらき佛師が火桶の中に坐して折節木屑の切徳をうけて無量の涙にひせば、あるは小春の掛茶屋の煙草盆に、ゆゑまゝ人のさゝめごとを聞く

はら／＼と炭團の上をしぐれけり

○炭竈 かまの煙はけつこと知らぬ人の思には劣らんも、小さき鯨の水吹き試むる様にかよひていどうれし、もしうらわかき小野の女房の心急ぎまて窓早く鎖せば、炭頭をたゝきて姑にはしたなまれ、よまなき思に沈みて、窓さし遅るれば、炭の惟虚くて、草紙の恐まきいりすみよりもわるま、なれぬとも炭焼衣のひとをひと、思はざるべく、炭車の岩がね道を上る戀はいと心もとなくなん

炭焼の半日休む祭かな

○炭斗 五石の瓢を椽近く据えたらましかば、やがて炭取のいとゆかまゝ、かの蓬心の誹をも免れ
たらましを、恵子は愚なる男なりけり、張子作りのそれは趣いと深し、たま／＼紙衣の翁のあなが
ちなる心をたよりにて、朝夕の御前去らず侍るものから、御足のはこび危きにつけて、折々御装の
はまにかゝりてくつがへさるれば、よりどころなく心細くて、襖の中なる反古籠の上をのみ戀ひま
さる

炭取は鴉の巢にも似たらんか

○炭鉤 深田をあさりま鷺の脛に似てすまじく、遠きより炭をかきよする手心いと覺束なし、煙
に立ち入りて焦熱の情をあらはし、用なき折は枯木の如く横はる、世にも怪しき瘦禪なり

かきよする石炭凍てゝからゝと

○石炭 渦まゝ黒煙見るからにいふせく、魔女が使ふ夥まき小鬼の走るらんと覺えて、おそろま
いはん方なし、それまた土くれの燃ゆると見ればをかまゝ、五平太の名さへいと甲斐／＼し、ひ
どつ／＼の燃屑、はた、蜀山の秋景を盡しつべくや

灯をつけて石炭船のみぞれ行く

吉田吞宇を哭す

穂 村

畏友吉田宗治君逝けり、暮鴉は庭後の松に鳴き、君は白玉樓中の人と爲りぬ、悽惻何ぞ堪へん、